

防災教育チャレンジプラン

阪神・淡路大震災の教訓を生かした

新たな防災教育の展開

防災教育実践事例

防災教育チャレンジプラン

主催：防災教育チャレンジプラン実行委員会

後援：内閣府 総務庁消防庁 文部科学省

国土交通省 日本赤十字社

全国都道府県教育委員会連合会

実践：兵庫県立舞子高等学校

は じ め に

兵庫県立舞子高等学校長 中杉隆夫

本事例集は「2004年度防災教育チャレンジプラン」におけるモデル校の一つ選ばれたのを機に、本校環境防災科の設置の背景やこの間の防災教育への取り組みを概括的にまとめたものである。

折りしも、本年は阪神・淡路大震災から10年目の節目の年にあたっており、こうした背景から、国連防災世界会議が本県で開催されたり、県・市町レベル、民間団体等による様々な震災関連事業が各地でとり行われ、これまでの取り組みの検証や今後の防災・減災に向けたあり方について多面的・多角的な視点から協議が進められているところである。

「一刻も早く忘れ去りたい」「いや、決して忘れてはならない」という二つの想いが複雑に交錯する中、震災の教訓を風化させない試みは、いよいよこれからが正念場を迎える。それは、忘却と記憶との闘いとも言える。私どもが最も注意しなければならないのは、歳月の流れの中で「防災」が「忘災」（災害を忘れてしまうこと）になってしまうこと。そうならないためにも、生涯学習としての防災教育の一層の充実を図るとともに、震災の体験・教訓を次代にしっかりと繋いでいくことであり、すべては平成7年1月17日に始まると思っている。

本校環境防災科が本県、本校に設置された意義を重く受け止め、その責務の一端を果たしていけるよう努めてまいりたい。

本書が今後、地域や学校等における防災教育を推進する上で些かの参考になれば幸いである。

環境防災科長 諏訪清二

環境防災科の設置に向けた研究を始めた5年前、見知らぬ土地でこれから乗り越えていかなければならない険しい峠道を見上げる旅人のように、途方に促されていた。この山を越えることができるのだろうか。半信半疑どころかほとんど可能性がない挑戦だと感じていた。数時間の投げ込み的な実践なら、そんなに難しくはない。あちこち調べ上げて、使えそうなものをそのままいただいて授業をすればいい。そんな試験的実践に対する外部評価はないだろうし、抱え込む責任もほとんどない。それが、学科の創設となれば話が違ふ。それも「全国で初めて」「被災地神戸」に設置され、兵庫県が進める「新たな防災教育」の具体化といった枕詞がついてくればなおさらである。考え込んだ。ただ、途方に促されている暇はない。前に進まなければならない。とにかく動き出した。

あれから5年。1期生を迎え入れてから3年。峠を登る旅人は、手を引かれ、背中を押され、道を敷いてもらいながらも何とか峠の頂に立つことができた。そこで見たものはもっと高く険しい次の山である。だが、もう立ち止まることはない。その山を征服する方法は知っている。この5年間、さまざまな人々や団体が舞子高校の防災教育を支えてくれた。そのネットワークが新たな課題にチャレンジしていく環境防災科のサポーターとなってくれるはずだ。防災教育に大切なのは体験だと思う。そしてこのネットワークがさまざまな体験を学校教育に持ち込んでくれる。

全国・全世界で、防災教育が当たり前のように実践されていくことを願う。そして生徒たちと創ってきた環境防災科の実践が、防災教育の広がりにも少しでも貢献できることを心から願っている。そんな意図で、この小冊子を作った。

も く じ

内 容	項
1. 環境防災科設置の背景	3
2. 環境防災科の教育目標	4
3. 特徴的な教育活動	5
4. 実践事例：環境防災科のとりくみ	8
5. 実践事例：総合的な学習の時間	20
6. ネパールで学んだこと	21
7. 成果と課題	22
8. 防災教育ネットワーク	25
9. 終わりに：防災教育のすすめ	26

1. 環境防災科設置の背景

舞子高校に環境防災科を設置することが決まったのが平成12年（2000年）3月。4月から2年間の研究・準備期間を経て平成14年（2002年）4月から本格的にスタートした。防災教育を推進する全国ではじめての学科であり、このような学科が被災地神戸に設置される意義は非常に大きい。兵庫県では阪神・淡路大震災以降、命の大切さ・助け合いのすばらしさなど、震災の教訓に学ぶ「新たな防災教育」を推進してきたが、それを高校の専門学科で展開しようというものである。

舞子高校は、震災直後から市民救命士（心肺蘇生法）の資格取得に全校でとりくみ、教育委員会が作成した防災副読本「明日に生きる」の実践事例集づくりにも参加するなど、県内の高校では先進的な実践を進めていた。被災地に位置する学校で、防災教育の実践があり、屋上には防災型のソーラーパネル（NEDO：新エネルギー開発機構）が設置されているなど、学科設置の条件がそろっていた。

防災教育を専門に行う学科は全国に先例がなく、教育課程の編成は試行錯誤を重ねた。研究担当の教員が大学を訪ね、防災会議やセミナーに出席し、書籍を読み、行政の防災セクションの助言を仰ぎといった作業を積み重ね、何とかカリキュラムの形を作ったのが平成12年（2000年）11月。教科は「環境防災」、科目は「災害と人間」「環境と科学」「社会環境と防災」「自然環境と防災」など、すべて学校設定科目とした。

専門科目一覧

学年	必修科目	選択科目
1年	災害と人間 環境と科学 防災情報	
2年	社会環境と防災 自然環境と防災 アクティブ防災 人と社会	環境防災購読
3年	卒業研究 社会環境と防災 自然環境と防災 アクティブ防災	防災情報 防災ワークショップ

防災教育を学校の核に据えるため、環境防災科設置に向けた研究とあわせて震災メモリアル行事「阪神・淡路大震災を忘れない～21世紀を担う私たちの使命～」を1月17日前後に開催してきた。このとりくみは平成17年（2005年）1月で5回目を迎えた。また、年に2回、学期末に行う避難訓練に防災教育をドッキングさせ、HR単位での防災学習と全校生への震災体験の講演や生徒の発表を取り入れてきた。

防災にかかわるさまざまな機関の理解・支援と阪神・淡路大震災を継承・発信しようとする多くの専門家の援助を得て、何とか先の見えるものとなってきたのが、学科スタート直前のことであった。

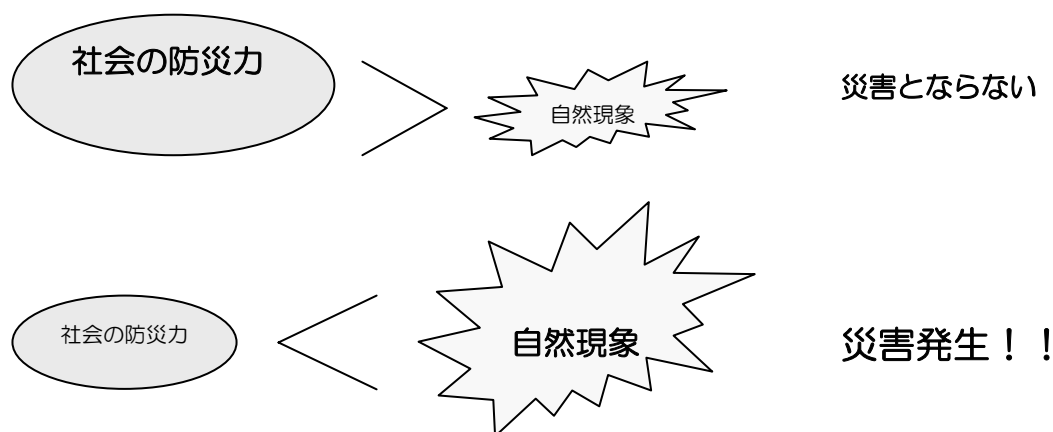
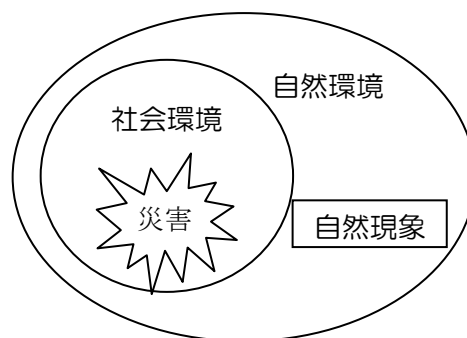
平成16年度（2004年度）に3学年がそろい、今春、最初の卒業生を世に送り出す。

2. 環境防災科の教育目標

環境防災科の基本的な教育理念は、次の3つである。

- ① 命の尊さや助け合いのすばらしさなど、阪神・淡路大震災の教訓を踏まえた防災教育を推進し、共生社会における人間としての在り方・生き方を考えさせる。
- ② 大学や関係機関等と連携した実践的・体験的な学習を通して、自然環境や社会環境と「防災」との関わりについて理解を深め、災害に対応できる能力・態度を培うとともに主体的に活動する実践力を育む。
- ③ 「Think Globally, Act Locally」（地球規模で考え、地域で活動する）姿勢を忘れず、常に広い視野を持ちながら、地域社会において防災のリーダーとして活躍できる人材を育成する。

環境防災科の教育課程は自然環境と社会環境という視点で構成されている。太平洋のど真ん中の台風や人が住んでいない地域の地震は災害ではない。それらは自然現象と呼ばれるものである。その自然現象が人の社会を襲い、そこに被害をもたらしたとき、災害となる。災害の大きさは、乱暴に言えば、この自然現象の大きさと社会の防災力、逆に言えば脆弱さとの比較で成り立つ。かなり強い地震でも、社会の防災力が整備されていれば被害は軽微で済む。ところが同じ規模の地震でも脆弱な途上国で起これば、相当な被害をもたらす。近年、途上国で続いている地震被害を見れば、このことは容易に理解できる。このように、防災には社会環境が強く関係しており、この社会環境を学び、どのような方法で災害を減少させるのか（減災）を考えることが必要である。環境防災科のカリキュラムは、新たな防災教育の中心課題である命の大切さや助け合いのすばらしさを縦軸に、自然環境と社会環境を横軸にとって教育課程を編成していった。



3. 特徴的な教育活動

3つの教育理念に従って専門科目を作った。専門科目は全体88単位のうち25単位～29単位。

教育活動は体験を基本にしている。体験を重視しているのは、防災が知識だけでどうにかなるものではないからである。防災に必要な最低限の知識と技術、そして強い意志を育むためには体験は不可欠である。さまざまな体験から、防災をすすめようとする意思が育まれ、コーディネートする力が育つ。もちろん、専門書の抜粋、新聞記事、学術論文、防災に関する英文などを読む授業も、知識の習得に正面から取り組むために大切にしている。授業形態で分類すれば、外部講師の授業、校外学習、発表、課題発見・解決型学習、国際理解・国際交流、小学校との交流、IT教育などに大別できる。また、災害時のボランティア活動も、これらの学習の延長線上にあって成果を挙げている。それぞれの概要は以下のとおり。

外部講師

阪神・淡路大震災の体験者や研究者を招き、教訓や復興時の課題、人間の知恵を学ぶ。命の大切さなどは、目の前で人が死んでいく現場に立ち会った講師の話から「言葉」としてではなく「実感」として学ぶ。年間を通じて、週に1回は誰かが講師として学校に来ていることになり、開かれた学校づくりにもつながっている。講師は大学や研究機関の専門家、行政、消防、自衛隊、NGO、NPO、学校の教員、福祉関係者、ライフライン関係者、企業関係者、国際機関関係者などで、さまざまな分野の震災体験や教訓、その後の復旧・復興での知恵を教えてもらっている。

CODE（NGO）による講演



校外学習

神戸市消防学校での訓練



人と防災未来センター、人と自然の博物館、野島断層保存館、震災記念公園などでの学習、六甲山での自然と防災のフィールドワーク、消防学校での1泊2日の訓練体験などを取り入れている。カリキュラム上、校外学習は1年生で5回、2年生で3回予定している、兵庫県や神戸市の総合防災訓練や垂水区の防災訓練が別途依頼され、実際は1年で6回程度、2年で4～5回程度となる。実際には学習内容はレポートにまとめ、パワーポイントを使って発表する。学校で学んだ知識と防災の現場が結びついて、より深い理解と更なる動機付けにつながっている。

発表

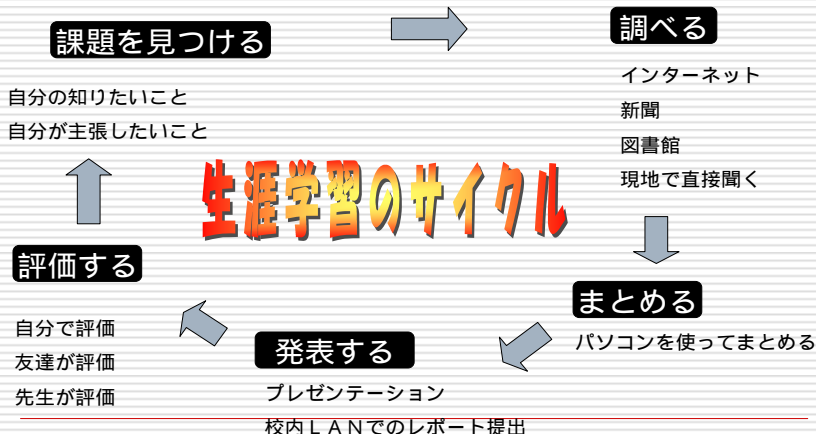
行政や NGO・NPO が主催する防災関係のワークショップ、セミナー、会議などで、環境防災科での学習を発表したり、震災体験を語ったりする。1年目、2年目は年に5回程度であったが、震災10年目の今年度は十数回になる。これらへの参加が専門家と行政、市民と舞子高校との防災ネットワークの構築につながり、それを通してさらに機会を与えられる。広がったネットワークから環境防災科の授業に参加してもらい、生徒が災害ボランティアに参加するときにもこのネットワークが役立つ。

「防災とボランティアのつどい」で発表



課題発見・解決型学習

授業では、外部講師の講演やさまざまな資料の講読で知識を身につける一方、課題を設定してインターネットなどを使って自主的に調べることで、自ら学ぶ姿勢を育てている。調べた内容はパソコンを使ってまとめ、プレゼンテーションを行うこともある。発表内容は教員だけではなく生徒同士でも評価しあい、次の課題設定に生かしている。

生涯学習につながる
課題発見・解決型学習

国際理解・国際交流

各国の代表者とディスカッション



アジア防災センター(ADRC)や国際協力機構(JICA)、国連地域開発センター(UNCRD)が発展途上国の行政官を対象に行う研修を受け入れ、生徒による震災体験の発表、環境防災科の教育活動の説明、グループに分かれての意見交流を行っている。途上国の課題を直接聞くことができ、国際交流のあり方を学ぶことができる。ほかにも、国連防災世界会議のフィールドワークをはじめ、さまざまな機会に多様な国々の方が舞子高校を訪問し、授業を共有している。

ネパールで学校、地域、行政と共に「地震に強い学校づくり」を行っている NSET-Nepal (NGO)

の協力を得て、生徒と教員がカトマンズを訪れ、防災学習とホームステイを核とする交流を行っている。貧しい国で一生懸命に生きる子供たちから、学ぶこと、生きることの大切さを教えられ、「地震に強い学校づくり」から、地域の材料を使い、地域の技術を用い、その技術が世代を超えて持続するような、知恵のある防災を学んでいる。

小学校との交流

近くの小学校と防災学習を共同で行っている。小学生にとっては身近な存在の高校生から震災体験を聞くことで震災の大変さを理解し、備えの大切さを学べるなどの成果がある。子供は学校で学んだことを家で親に話す。防災が子供から家庭へ、家庭から地域へと広がっていく。一方、高校生にとっては学習内容の定着、発表方法の体得などに成果がある。詳しくは実践事例のページを参照。

学年	平成14年度 (2002年度)	平成15年度 (2003年度)	平成16年度 (2004年度)
3年	地域安全マップづくり	地域安全マップづくり	地域安全マップづくり
4年	震災体験 地震防災の備え	震災体験 地震防災の備え	阪神・淡路大震災 台風23号ボランティア 新潟県中越地震募金 耐震実験 液状化実験
5年	阪神大水害と土石流実験		
6年	震災体験 地震防災の備え 震災メモリアル行事での クイズラリー	地震と火山 震災メモリアル行事での クイズラリー	震災メモリアル行事での クイズラリー

壁新聞でわかりやすく説明



IT教育

「防災情報」といった科目で情報を学ぶが、それ以外の専門科目でも日常的にコンピュータを用い、調べ学習や発表にとりくんでいる。情報の管理や著作権などの、権利の保障の学習にも力を入れている。

実践事例：環境防災科のとりくみ

県立舞子高等学校環境防災科では、総合的な学習の時間や選択科目の有効利用で防災教育を行うほかの学校と違い、専門科目で防災を学ぶ。3年間で履修する88単位のうち25単位（選択によっては29単位）が専門科目である。時間にすると約750時間。だから、多様な活動を行えるのは当然で、それをそのまますべての学校で実践するのは難しい。それよりも、舞子高校で行っている防災学習の中から利用できそうな内容を選んで、それに自分の地域に固有の災害や風土といった要素を加味して修正すれば、日本のどこでも、どんな学校でも防災教育を行えるのではないだろうか。そのような意図をもって環境防災科の実践事例をまとめた。なお、地震や火山、気象といった理科や地学で学習できる内容は学習指導要領や教科書が完備されており、その気になればいつでも学習できるので省いた。ここにまとめたものはこれまでほとんど取り上げてこられなかった社会環境と防災にかかわる学習活動である。

以下の学習はすべて高校生を対象として行ったが、同じ活動を工夫次第で小学生や中学生でも取り組むことができる。ここで挙げている活動事例はすべて素材である。料理方法は地域と学校の実情、学習者の発達段階に合わせていろいろと工夫して欲しい。

実践事例	ページ
1. 体験者の講話	9
2. 博物館での学習	9
3. コンセプトマップ	10
4. 災害対応シミュレーション	10
5. 被害関連図	11
6. 地域安全マップ	11
7. 災害図上訓練	12
8. 我が家の防災対策	13
9. 架空のまちの防災対策	13
10. 壁新聞づくり	14
11. 世界の災害地図づくり	14
12. 英語を通じた防災学習	15
13. 長田のまち歩き	15
14. まちづくり10か条	16
15. 六甲山フィールドワーク	16
16. 異年齢間の防災学習（高校生が小学生を教える）	17
17. 震災メモリアル行事「阪神・淡路大震災を忘れない」	18

1. 体験者の講話

目的	➤ 実体験を通して命の大切さや助け合いのすばらしさ、災害の恐ろしさ、復旧・復興過程での人間の英知を学ばせる。
方法	➤ 阪神・淡路大震災の体験者を学校に招き、被災体験や緊急対応、その後の復旧・復興についての話を聞く。生徒は、その内容をレポートにまとめる。 消防隊員 警察官 自衛隊員 避難所運営にあたった教員 ボランティア 医師・看護師 心のケアの専門家 建築家 大学教授 ライフライン（ガス、電気、水道、鉄道）関係者 行政（港湾） など
時間	➤ 一人の話が1～2時間。 ➤ レポートまとめに1時間。
成果	➤ 実体験に基づく話は重みがあり、あえて「命の大切さ」や「助け合いのすばらしさ」を強調しなくても、講師の話を聞いて実感できる。 ➤ 災害前の備えの不十分さ、災害の恐ろしさ・つらさなど、反省すべき内容を事例で聞け、防災に取り組む大切さを学ぶことができる。 ➤ 助け合いや復旧・復興過程での工夫などの話から、人間の持つすばらしい力を知ることができる。

2. 博物館での学習

目的	➤ 専門的な研究を行う施設を訪れ、災害の実態を学ばせる。 ➤ 専門家による特別授業を通して、防災に興味を持たせる。
方法	➤ 防災関係の博物館を訪れ、見学、語り部による体験談、研究員による特別授業を行う。 学習内容はレポートにまとめる。 人と防災未来センター 人と自然の博物館 野島断層保存館
時間	1日 あるいは半日
成果	➤ 防災への興味を高める。 ➤ 災害の恐ろしさを実感できる。 ➤ 自分の地域に固有の災害を知り、それに立ち向かう人間のすばらしさを学ぶ。

野島断層保存館で語り部の話を聞く



3. コンセプトマップ

目的	➤ 災害が自然環境と社会環境の両方の要素が密接に絡み合っていることを学ばせる。
方法	➤ B4用紙の中央に「阪神・淡路大震災」と書く。 ➤ そのまわりに、「ライフライン」「火災」「建物倒壊」「ボランティア」など、自分が思いつくすべての項目を並べる。 ➤ 関連する項目同士を線で結び、課題、問題点、改善策などを書き足していく。
時間	➤ 1時間。 ➤ ただし発表を入れるなら、発表の形態によってもう数時間必要となる。
成果	➤ 災害に対して漠然と持っているイメージを整理することができる。 ➤ 一定期間の学習の前後に行うと成果が良くわかる。1回目にはほとんど書けなかった生徒も、学習を終えて2回目には複雑に入り組んだマップを書き上げることができる。

4. 災害対応シミュレーション

目的	➤ 災害時に自分がどう動くかを考えさせる。 ➤ 事前の備えに対する意識を高める。																																																																													
方法	➤ 横軸に、地震発生直後、10分後、30分後、1時間後、2時間後、半日後、1日後、2日後、3日後、1週間後、2週間後・・・というように時間を設定する。 ➤ 縦軸には1日24時間をとる。 ➤ 時系列に沿って、自分がどこにいてどんな行動をとっているかを書き込んでいく。 <table><tr><td></td><td>直後</td><td>10分後</td><td>30分後</td><td>1時間後</td><td>2時間後</td><td>・・・</td></tr><tr><td>4時</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>6時</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>8時</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>10時</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>12時</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>14時</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>16時</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>18時</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>20時</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>22時</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table> この欄に行動を記入していく。実際の記入枠はもっと広い。		直後	10分後	30分後	1時間後	2時間後	・・・	4時							6時							8時							10時							12時							14時							16時							18時							20時							22時						
	直後	10分後	30分後	1時間後	2時間後	・・・																																																																								
4時																																																																														
6時																																																																														
8時																																																																														
10時																																																																														
12時																																																																														
14時																																																																														
16時																																																																														
18時																																																																														
20時																																																																														
22時																																																																														
時間	➤ 1～2時間。																																																																													
成果	➤ 縦軸に1日の生活サイクルを取り入れ、1日のかなりの時間を自宅で過ごしていることに気づかせることで、自宅での防災対策が大切であることを学ばせる。 ➤ 緊急対応、復旧・復興の過程で、人の助け合いや英知を知ることができる。 ➤ 一連の地震学習の前後で行うと、学習の成果が読み取れる。																																																																													

5. 被害関連図

目的	➤ 災害の大きさには自然現象の強さだけではなく社会環境（社会の防災力）が大きく関わっていることに気づかせる。
方法	➤ B4用紙を縦に使い、上から4分の1くらいのところに紙幅いっぱい「阪神・淡路大震災」と書き込む。 ➤ その上は地震が発生する以前の社会環境、その下は地震発生以後の社会環境とする。 ➤ 地震発生以前の欄には、その社会の実体をできるだけたくさん流れ図形式で書き上げる。 例：建物の強度、交通網、人口密集度、消防や自衛隊、コミュニティ、備えなど ➤ 地震発生以後の欄には、予想される被害や緊急対応、復旧・復興の過程での課題をできるだけたくさん流れ図形式で書き込む。
時間	➤ 1～3時間程度 ➤ 学習者のレベルにもよるが、高校生で防災を真剣に考えている生徒だと3時間ほど必要。
成果	➤ 社会環境の複雑さと防災の難しさを学ぶ。 ➤ 社会の中で自分が何をできるかを考える。

6. 地域安全マップ

目的	➤ 自分の住む地域を知り、自分に何ができるかを考えさせる。
方法	➤ グループに分かれて地域を回り、危険箇所や避難所、消火栓などをチェックする。 ➤ 自慢できる場所（風光明媚なところ、安全なところ、公園など）もチェックする。自分の地域の地図に危険箇所しか記されていないとしたら、誰がそんなまちに住みたいと思うだろうか。いいところもあるということを発見することも大切である。 ➤ デジタルカメラで写真をとる。 ➤ 用意した地図にチェックした箇所を落とし込み、写真を張って、感想などを書いていく。 ➤ 舞子高校では地域の小学生と一緒に行った。自治会や防災福祉コミュニティ（神戸）の大人と一緒に回ることもできる。
時間	➤ 半日、あるいは1日 みんなでマップづくり
成果	➤ 地域を知ることができる。 ➤ 地域の人と一緒にとりくむことでコミュニケーションがとれ、日ごろの地域の防災訓練に参加したり、学校行事に地域の人を招いたりでき、さらに災害時の避難所運営などもスムーズになる。 ➤ 地域の人がいっしょにとりくむ過程は地域のつながりを強める。

7. 災害図上訓練（A：地図を用いる B：役割を想定する）

目的	➤ 災害をシュミレーションし、いざというときに備える。
方法	【A：地図を用いての図上訓練】 ➤ グループに分かれて自分たちが作った地域安全マップを使う。繰り返して書き込みできるように厚めのビニールで地図を覆う。 ➤ 全体をまとめる役割（教師）をおく。 ➤ 震度6強の地震が発生した（例）という情報を与え、討議を開始する。 ➤ 「〇〇時〇〇分、町内3箇所で火災発生」「避難所に300人が避難」などの情報を教師が各グループに逐一与えていく。 ➤ 与えられた情報をもとに、対応策を検討していく。 ➤ 検討経過をメモに残しておき、最後に課題を話し合って発表する。 【役割を想定しての図上訓練】 ➤ グループに分かれてそれぞれ役割を担う。 行政 学校 自衛隊 警察 消防 NPO など ➤ 全体をまとめる役割（教師）をおく。 ➤ 「〇〇時〇〇分、町内3箇所で火災発生」「避難所に300人が避難」などの情報を教師が各グループに逐一与えていく。ただし、あるグループには伝えた情報を別のグループには伝えないなど、実際に即して運営する。 ➤ あるグループから別のグループへの依頼や連絡もできる（例：学校から教育委員会へ、避難者数の報告、困っていることの解決依頼など）。 ➤ 検討経過をメモに残しておき、最後に課題を話し合って発表する。
時間	➤ 2時間～4時間
成果	➤ 地域での助け合いや、行政との連絡、情報収集など、市民として総合的に防災に取り組むことができる。 ➤ 地域の弱点を考えることができる。 ➤ 代理体験することで、実際の災害時での対応力を伸ばす。 ➤ 問題解決、コーディネート力を育む。

災害図上訓練

D I Gで知られている。Disaster Imagination Game の略。大人から子供まで楽しみながら地域防災を考えることができる。同年齢で行ってもいいし、地域でさまざまな年齢の参加者で行ってもおもしろい。このゲーム、実はさまざまなバリエーションを作ることができるのではないかと考えている。

8. 我が家の防災対策

目的	➤ 防災は自助（自分の命は自分で守る）が一番大切であることを学ばせる。 ➤ 耐震補強、家具の転倒防止などの備えが必要であることを学ばせる。
方法	➤ 阪神・淡路大震災の死者の9割は建物倒壊による圧死であることを学ぶ。 ➤ 「我が家の耐震診断」の冊子やHPを参考に、耐震診断方法を学ぶ。 ➤ 自分の家の見取り図を書いて、耐震診断をする。 ➤ 将来自分が建てたい家を考え、見取り図を書く。 ➤ その家の耐震診断を行う。 ➤ 不十分であれば設計図を書き直す。 ➤ 家具の転倒防止や避難所の確認など、我が家で考えている防災についてまとめる。考えていなければ今後とりくみたいことでもかまわない。
時間	➤ 震災の教訓と耐震方法の学習に1時間。 ➤ 実際の耐震診断と将来の家の設計と耐震診断、再設計に2時間 ➤ 我が家の防災体制検討に1時間。
成果	➤ 耐震補強と家具の転倒防止が命を守る第一歩であることを学ぶ。 ➤ 家庭生活を防災の視点で見直すことができる。

9. 架空のまちの防災対策

目的	➤ 風土の学習と防災の複雑さを通して、社会環境への知識の必要性を感じさせる。
方法	➤ 自分で架空のまちを設定する。必要な要素は、地形、自然環境、人口、産業、インフラなど、あらゆる社会環境、自然環境に及ぶ。 ➤ 自分で設定したまちの防災体制を考え、マニュアルにする。
時間	➤ 5～10時間（取り組む年齢と期待する成果によって時間は変わる）
成果	➤ 架空のまちを設定するために、地理や地学などの知識を必要とすることから、これらの科目を総合的に関連付けることができる。 ➤ 自分が作ったまちは愛着がある。愛着を持ってまちを守ろうとする市民の姿勢が身に付く。 ➤ 防災という課題を総合的に考えることができる。 ➤ 防災を専門とする大学生ならかなり高度な内容のものができ、小学生でも、自分の地域の地図に絵を書いて自分の考えを書き込むことができる。低年齢では意識付けに重きをおき、学習が進むほど専門的な内容にすれば良い。

10. 壁新聞づくり

目的	➤ 学習したことや自分で調べたことを壁新聞にすることでその内容を定着させる。 ➤ 壁新聞を使って発表することで、学習の定着と発表能力の涵養につながる。
方法	➤ 課題を設定します。例えば、阪神・淡路震災で学んだことを「被害状況」「消防」「ライフライン」「避難所」などの課題に分け、数人のグループで壁新聞にまとめる。 ➤ 壁新聞を使って学習内容を発表する。 ➤ 発表に対して、生徒同士の評価を行う。
時間	➤ 壁新聞の作成に2～4時間 ➤ 発表はどれだけの時間を与えるかによるが、2時間～3時間程度が適切。
成果	➤ 学習内容の定着を図ることができる。 ➤ 発表能力を高めることができる。 ➤ 相互評価を行うことで、自分の学習で不足していた箇所がわかり、再度課題を設定し調べなおすという学習のサイクルを実践できる。 壁新聞づくり  クラスで発表 

11. 世界の災害地図づくり

目的	➤ 世界には地震、火山をはじめ、洪水、台風、干ばつ、土砂災害など、さまざまな災害があることを学ばせる。
方法	➤ インターネットや書籍を利用して世界の災害について調べる。 ➤ 調べた内容を世界地図に書き込む。
時間	➤ 世界の災害調べに2～3時間 ➤ 地図作成に2時間
成果	➤ 日本に固有の災害である地震、火山、洪水以外にも多くの災害が世界にあることを学ぶ。 ➤ 災害の多くが発展途上国、特にアジアの国々で発生していることを知り、国際貢献のあり方を考えることができる。

12. 英語を通した防災学習

目的	➤ 国際社会で活動するには最低限、英語の運用能力が必要であることを学ばせる。 ➤ 英語が世界の人々とコミュニケーションするために必要不可欠な道具であることを学ばせる。
方法	➤ 防災に関する簡単な英字新聞の記事、国連やアジア防災センターの防災に関する論文、あるいはもう少し平易な文章を読ませる。 ➤ 英語の授業のように教師が主導のときもあれば、自分で辞書を引いて翻訳する、あるいはグループで分担を決めて翻訳することもある。 ➤ 被災地から世界に向けて防災のメッセージを英文で書く。 ➤ 防災の英語ビデオを見せる。事前にそのビデオの内容を英文で学習し、必要な語彙は理解しておく方が理解度は高まる。 ➤ ネパールとの交流の準備授業や途上国の防災を紹介する資料は極力英語を用いる。 ➤ アジア防災センター、国連地域開発センター、JICAなどの研修を受け入れ、自分たちの取り組みを英語で発表する。
時間	➤ 英文の難易度と学習の形態によって使う時間は異なる。
成果	➤ 英語の必要性を感じさせることができる。 ➤ 英語の好きな生徒や外国で活動したいと思っている生徒にとっては、自分の好きなことと防災がつながり、世界をこれまでとは違った目で見ることができる。

13. 長田のまち歩き

目的	➤ 実際に現場を踏むことで、本やインターネットでは感じ取れない地域の実情を実感させる。 ➤ 現場の体験を大切にする姿勢を育む。 ➤ 地域住民との対話から、市民の発想を知ることができる。
方法	➤ 事前学習として、長田の歴史と震災の被害についてインターネットを使って調べ、レポートにまとめる。 ➤ 4人程度のグループに分かれ、自分たちが訪れたい地域を決め、聞きたいことを考える。 ➤ 半日かけて地域を歩き、いろいろな人にインタビューする。 ➤ 事前に調べたこと、当日のインタビュー、感想などをレポートにまとめる。
時間	➤ 事前学習に3～4時間 ➤ まちあるきに半日 ➤ レポート作りに2～3時間
成果	➤ 本やインターネット、報道では知ることのできない考え方に接することができる。 ➤ まちの歴史、震災被害などを事前に学習することで、地域を見つめなおすことができる。 ➤ インタビューを通して大人との接し方、人の考えを真剣に聞く姿勢が身につく。

14. まちづくり10か条

目的	➤ 防災のまちづくりについて考えさせる。 ➤ 市民、行政、NGO・NPOなどの関係について考えさせる。
方法	➤ まちづくりについての文章を読ませる（「阪神・淡路大震災 問わずにいられない」【神戸新聞社】、「防災はまちづくりの隠し味に 社会教育」【文部科学省】）。 ➤ 市民、行政、NGO・NPOがまちづくりに果たしている役割を文章に沿って解説する。 ➤ 自分が考えるまちづくり10か条を作成する。 ➤ 考えた10か条を、パワーポイントを使って発表する。
時間	➤ 文章講読と解説に3時間 ➤ まちづくり10か条づくりに4時間 ➤ 発表に1時間（優秀なもののみ）
成果	➤ 市民中心のまちづくり、市民中心の防災についての姿勢を育てることができる。 ➤ 自分の考えを発表する姿勢が身に付く。

15. 六甲山フィールドワーク

目的	➤ 阪神・淡路大震災、阪神大水害について社会環境（「災害と人間」）と自然環境（「環境と科学」）の両面から学んだ後、学習の集大成として六甲山を訪れ、断層、風化花崗岩、砂防ダム、水害記念碑などを見学して、知識と体験を結び付ける。
方法	➤ 数10時間をかけて社会環境と自然環境の両方の視点から阪神・淡路大震災と阪神大水害を学ぶ（これは環境防災科でないと不可能であろう）。 ➤ 六甲山を訪れ、さまざまな地形や断層、砂防ダムの見学、風化花崗岩の採集などを行う。 ➤ 見学内容をレポートにし、パワーポイントを使って発表する。
時間	➤ 事前学習は「災害と人間」「環境と科学」という科目で数10時間をかけて行っている。 ➤ フィールドワークは1日 ➤ レポートとパワーポイント作成に4時間程度 ➤ 発表に4時間（1人5分以内）
成果	➤ 「災害と人間」「環境と科学」で教科を横断して行った学習を、体験を通じて一つにつなぐことができる。 ➤ 現場を体験することで、学習した知識が生きてくる。 風化花崗岩のバンドランド  水災記念碑 

16. 異年齢間の防災学習（高校生が小学生を教える）

目的	➤ 高校1・2年生が小学校1・2年生当時に体験した阪神・淡路大震災を今の小学生に語り継ぐ。 ➤ 自分たちが学んだことを次の世代に伝える。 ➤ 実験や壁新聞、スライドを使って小さな子供に教えることで、自分の理解を深め、わかりやすい表現に工夫を凝らす。			
	学年	平成14年度 (2002年度)	平成15年度 (2003年度)	平成16年度 (2004年度)
	3	安全マップづくり	安全マップづくり	安全マップづくり
	4	震災体験 地震防災の備え	震災体験 地震防災の備え	阪神・淡路大震災 台風23号ボランティア 新潟県中越地震募金 耐震実験 液状化実験
	5	阪神大水害と土石流実験		
	6	震災体験 地震防災の備え 震災メモリアル行事 クイズラリー	地震と火山 震災メモリアル行事 クイズラリー	震災メモリアル行事 クイズラリー
方法	➤ 「地域の安全マップづくり」は別項参照。 ➤ 「震災体験」「阪神・淡路大震災」「地震防災の備え」の発表では「地震の概要」「震災体験」「消防」「ライフライン」などの課題別にグループ分けし、事前に壁新聞とパワーポイントをつくる。当日は小学生にわかるような言葉を選んで発表する。 ➤ 「阪神大水害」では、授業で作成した「阪神大水害新聞」を使って災害の様子を教える班、国土交通省が作成したビデオを見せる班、簡単な土石流実験を見せる班などに分かれて小学生に教える。 ➤ 「耐震実験」では紙の模型で家の骨組みを作り、ゆすって見せる。 ➤ 「液状化実験」ではペットボトルを使って液状化によって地中に埋め込まれたマンホールが浮かび上がる様子を再現する。 ➤ 「台風23号ボランティア」や「新潟中越地震募金」といった自分たちが行ったボランティア活動を紹介し、感じたことを話す。 ➤ 「震災メモリアル行事クイズラリー」は震災メモリアル行事で行う。パネルや壁新聞で阪神・淡路大震災、備え、ボランティア、ライフライン、消防、自衛隊の装備品などを展示し、それを見学しながらクイズに答えていき、防災博士をめざす。			
時間	➤ 実際の実施時間はどの学年も2時間程度だが、準備に3～4時間程度必要。			
成果	➤ 高校生にとって自分たちが学習したことを定着させることができる。 ➤ 小学生にとって身近な高校生から学ぶことで興味がわく。 ➤ 学んだ小学生が家庭で親に学んだことを話す効果が期待でき、防災を家庭から地域へとボト			

ムアップしていくことができる。

17. 震災メモリアル行事「阪神・淡路大震災を忘れない」

目的	➤ 1月17日前後に実施し、阪神・淡路大震災の体験を語り継ぐ。 ➤ 若者が防災に取り組んでいることを広く発信し、21世紀の防災の中心に若者、市民を位置付ける。			
方法	実施年	全 体 会	分科会	その他
	平成13年 (2001年)	心のケアの記念講演	25分科会	炊き出し
	平成14年 (2002年)	震災当時の知事による講演	23分科会	炊き出し
	平成15年 (2003年)	中学生による防災のとりくみ発表 と専門家と生徒によるパネルディ スカッション(防災で若者の果たす 役割)	20分科会	炊き出し 小学生を対象と した展示とクイ ズラリー
	平成16年 (2004年)	外から見た震災と中から見た震災 の発表 中学生、高校生、地域住民がパネリ ストとなり、地域からの防災を討論	10分科会	炊き出し 小学生を対象と した展示とクイ ズラリー
	平成17年 (2005年)	追悼集会 歌「しあわせ運べるように」 新潟県の高校生からのメッセージ 記念講演「若者に期待すること」	10分科会	炊き出し 小学生を対象と した展示とクイ ズラリー
——2005年1月の内容——				
◆ 記念講演				
震災と若者たち～減災文化の担い手として～【専門家】				
◆ 分科会				
🚒 言葉で伝える震災体験【大学教授】				
🚒 災害救援の文化とは【NGO】				
🚒 大震災を体験して【消防】				
🚒 陸上自衛隊(中隊)の				
🚒 被災地現場における創作・救助活動【自衛隊】				
🚒 出会った人 見てきたもの 考えること				
🚒 ～神戸に生きる学生として～【ボランティア】				
🚒 高校生が震災を伝えるために何ができるか				
🚒 ～放送委員会の活動を通じて～【高校生】				
🚒 ネパール交流報告【高校生】				
🚒 環境防災科3年間の総括・新潟の高校生との交流【高校生】				
🚒 卒業研究1 「メディア」と「温度差」と「人間」など【高校生】				

卒業研究2 防災ゲーム～防災博士になろう～など【高校生】

- 舞子高校1・2年生以外では、多聞東中学校1年生が全体会に参加、多聞東小学校6年生が展示とクイズラリーに参加する。地域住民や教育関係者、マスコミ関係者も自由に参加することができる。
- 行事の構成は教員が考え、講師の依頼なども教員が行う。
- 事前の展示物作り、当日の司会、クイズラリーでの説明と引率、記録などは生徒が担当する。
- 生徒がまとめた記録をもとに教員が記録集をつくり、冊子にする。

生徒が分科会を運営



時間

炊き出しは1000人分



- 事前準備に10時間程度
- 当日は午前中の行事。
- 冊子まとめなどに2～4時間。

成果

- 阪神・淡路大震災をはじめ、さまざまな災害を体験した講師の話から、命の大切さや助け合いのすばらしさを学ぶ。
- 体験者にとっては発表の場、生徒にとっては学びの場を提供することで、震災体験の継承・発信を進める。
- 震災体験を風化させないために記録集を発行し、この記録集が防災教育の教材となる。
- 防災に関わる人的資源のネットワークづくりができる。

記念講演



5. 実践事例：総合的な学習の時間

平成16年度（2004年度）、総合的な学習の時間を使って、2年生を対象にして、週に1時間、防災教育を通年で展開した。テーマは以下のとおり。

- ◆ インターネットを使って防災のさまざまな課題を調べる
- ◆ 「語り継ぎたい命の尊さ」【一ツ橋出版 住田功一】を使って「命」を考える
- ◆ 阪神・淡路大震災をクイズ形式で総括
- ◆ 藍染実習と吉野川の防災の知恵・絵本作り
- ◆ 世界の災害を英語で読む
- ◆ 歌を通してコミュニケーションの大切さを学び、ボディ・パーカッションで表現
- ◆ 阪神・淡路大震災を素材にディスカッションやワークショップ
- ◆ 自然や防災、命や仲間をテーマにした童話を読む
- ◆ 六甲山の立体地図をつくる

なお、上記の4コマの授業とは別に、学期に1回、防災のフレームを示す授業を行った。内容は災害の定義、自然環境・社会環境と災害の関係、ボランティア、まちづくり、途上国の知恵、防災とは何か、なぜ防災か、いつ防災か、など。4コマのさまざまな学習が防災というフレームにうまく入り、生徒の興味を持っているテーマが防災とつながっていることを示した。

目的	➤ 防災力を持った市民を育成する。 ➤ 防災教育を通して教科の学習意義を再確認する。 ➤ 多くの教員が参加することで防災教育に広がりを持たせる。
方法	➤ 実施クラス数+αの教員が、自分の得意な防災の話を用意する。分野は大別すれば自然環境と社会環境、細かく分ければ「地震のメカニズム」「災害と文学」「国際貢献」「非常食」「ボランティア」「命」などさまざま。 ➤ それらの教員が一人4時間を持ち時間として、各クラスをローテーションで回る。 ➤ 生徒から見れば、年間で6人～7人の先生が自分の得意な防災の話をしてくれることになる。 ➤ 防災の骨格となる話については環境防災科の教員が全体を対象に講演する。
時間	➤ 週に1時間を時間割の中に配当する。 ➤ 一つのトピックについて4時間を持ち時間する。 ➤ 全体への講演は年に3回とする。
成果	➤ 教員にとって、自分の得意分野から防災にアプローチすることになり、取り組みやすく、広がりを期待できる。 ➤ 生徒にとってさまざまな分野の防災を聞くことができ、社会環境と防災、自然環境と防災について知識を深めることができる。

6. ネパールで学んだこと

カルチャーボックスの交換



舞子高校で行っている大きな体験の一つにネパールでの交流がある。夏休みに1週間、首都カトマンズを訪れて、そこで地震に強い学校づくりをすすめているNSET-NepalというNGOの支援で、現地での学校補修を見学したり、子供たちと交流したりしている。プログラムのメインは現地の学校でのお祭りとホームステイ、防災に関するスピーチコンテストである。お祭りは、現地の子供たちが民族の踊りと歌でもてなしてくれる。舞子高校も歌と踊りを披露する。その間にカルチャーボックスの交換があって、

震災についての短いスピーチがあったりする。ホームステイではカトマンズ校外の田舎の家に泊まるのだが、トイレが田んぼの真ん中にあたり、家の中で牛や鳥を飼っていたり、夜中に停電したりしてなかなかワイルドな体験ができる。そこで手振り、身振り、片言英語でコミュニケーションをとる。スピーチコンテストでは震災体験や環境防災科で学んだことを伝える。

NSET-Nepal のメンバーはカトマンズで地震防災をすすめているが、カトマンズは1934年の大地震を最後に大きな地震に襲われていないので、市民の意識は高くない。まちそのものは極めて脆弱で、震度6弱程度の地震でもひとたまりもないだろうと思われるのだが、市民は関心を持っていない。そこでNSET-Nepal は地域の学校を補強することで住民の意識を高め、地震に備えようとしている。学校の補修ために教育委員会や行政、学校の先生だけでなく、生徒や村人、石工も一緒になって委員会を作って議論し、意識を高めている。文字を読めない人や地震の難しい説明を理解できない人にも一目でわかるように、補強した模型の家と補強していない模型の家を同じ台の上で揺すって、補強していないものだけが壊れる実験を見せる。石工に耐震補強の技術を教え、その教えられた石工が別の補修現場でまだ技術を習得していない石工に教えるといった方法で技術を広めている。彼らの原則は、誰にでも耐震補強が必要であるとわかるような説明をする（Accountability）、現地で調達できる資材とお金を使う（Affordability）、サポートするNGOがいなくなっても住民が耐震補強の技術を伝承し、防災の大切さを伝えていく（Sustainability）の3つ。そこに舞子高校の生徒の震災体験を取り入れ、震災時に子供がどんな体験をしたかを市民に知ってもらうことで、防災の大切さに気づいてもらおうとしている。

彼らが「防災文化」という言葉を使ったのが印象に残っている。防災を特別なこととして捉えるのではなく、日常的に身の回りにあるものつまり文化として定着させようということだと思う。特別なことにとりくむのは大変だが、日常的に身の回りに自然にあれば、何も特別な苦労はいらない。これは途上国の知恵である。舞子高校の生徒は実はこんな途上国の知恵から学んでいる。

脆弱な建物



NSET-Nepal が改修した学校



7. 成果と課題

環境防災科がとりくんできた新たな防災教育の成果は次の3つである。

(1) 生徒ひとり一人が命の大切さや助け合いのすばらしさを考え、社会に貢献しようとする姿勢を伸ばしていく。

防災教育でもっとも大切にしたいのがこの「一人ひとりの成長」である。生徒たちの成長のいくつかをここで紹介したい。

- ・ 震災で祖母を亡くした。母子家庭で祖父母に育てられていた。震災後、母の自転車に乗せられて銭湯に行ったとき、赤ん坊を連れて車で来たお母さんに乗っていかないと声をかけられ、その親切さが忘れられない。環境防災科でさまざまな途上国の災害に出会い、もともと興味があった国際貢献と結び付けて考えるようになった。大学では農業を学び、卒業後は NGO で農業支援、防災指導を行いたいと考えている。卒業直後の3月、イランでボランティアをする予定。
- ・ 震災時、被災した友人を家に泊ませたりして、大勢の人間の世話をしていた父親の背中を見ていた。長田の父の工場は壊滅的に壊れたが、復興に向けて軽トラックの荷台に乗せたタンクに水を入れて毎日長田に通う父を強い存在と感じた。将来は、人の役に立てるように法律を学んで、災害弱者を支援したい。
- ・ 幼稚園の先生になりたいと小さいころから考えていた。防災を学ぶうちに、子供を守るシステムが絶望的なほど無いことに気づき、子供の命、安全を守ることでできる保育士になりたいと考えるようになった。
- ・ 母を震災で亡くした。母の代わりに福祉に奔走する父の姿を最初は寂しく見ていた。母を亡くし、父は仮設住宅の訪問で夜中まで帰ってこない。寂しくて地震を恨んだ。そのうち、父と仮設住宅を回るようになり、住民に励まされるようになった。環境防災科に入って、母を助けようとした救助隊の隊長の話を聞き、つらくて動けなかった。今では、父が行っている復興住宅の茶話会や花見、クリスマスパーティに友達を誘っている。将来は福祉の世界で働きたい。
- ・ ものづくりが好きで、耐震構造を簡単に示すことのできる木の模型を作った。将来は建築か震災に強い電化製品の開発に携わりたい。
- ・ 消防士になりたい。授業で心のケアについて学んだ。消防士が駆けつける現場には、火災で家を無くし、心が傷ついている人がいる。その人の心のケアができる消防士になりたいので、大学は福祉系で、心理学を専攻することにした。
- ・ 震災では、神戸市西区に住んでいたこともあり、大きな被害を受けることはなかった。農村地帯のコミュニティが心強かった。今はまちづくりに興味があって、NPO のメンバーとなって、まちづくりに参画している。大学でもまちづくりをしたいが、そんな学部はなさそうだ。だから、大学に自分の「まちづくり」を持ち込みたい。
- ・ 母親が救急車で運ばれたとき、救命士が懸命に助けてくれた。救命士になりたいし、今は心のケアに興味がある。大学では心理を学びたい。

- ・ 将来は普通の会社員だろう。でも40才代になれば自治会で防災を進めているかもしれない。70歳になれば自分の孫とその友達を集めて阪神・淡路大震災を語ってやりたい。

将来の夢だけではない。今も、防災に精一杯とりくむ生徒が大勢いる。台風23号による水害のボランティアを学校で呼びかけたときのことだ。10月23日(土)、24日(日)の二日間の緊急ボランティアに、ちょうど中間考査の最中だったにもかかわらず延べ26人が参加した。翌週の30日(土)には普通科生徒も参加して34人、31日(日)には20人が参加した。この二日間と、11月3日(火)、6日(土)には、新潟中越地震の街頭募金も行い、100万円あまりを集めた。被災地の高校生への激励文を作成し、生徒の代表者が11月14日(日)、15日(月)、現地の高校を訪れた。今後は震災体験を共有しながらメールを通して交流を深めようとしている。

平成17年(2005年)1月で、震災10年となる。10周年の記念行事がさまざまに行われ、環境防災科の生徒が発表者として参加するものも10を超える。それらの行事にも、生徒の参加希望は多い。自分の意見を発表し、パネルで取り組みを紹介し、英文でメッセージを作り、震災体験を継承・発信している。

1月17日、小・中学校では震災の追悼行事や学習会が開かれた。環境防災科の生徒が卒業したいいくつかの中学校と一つの小学校から、生徒を講師として招き、震災体験を語り、防災の大切さを話して欲しいとの依頼があった。震災を覚えている最後の世代として、体験を次の世代に語り継ぐために参加した。

3年生の授業「卒業研究」では、小学校2年生のときの震災を体験集「語り継ぐ」にまとめた。39人159ページの大作となった。震災の恐怖と混乱の中で小学校2年生が震災をどのように見つめていたかが強く伝わってくる。震災直後から、被災地では、勉強道具がなくても、手に入る紙と鉛筆を使って作文指導が行われた。恐ろしかった体験や思ったことをそのまま紙に書いていった。それらをもとにして震災体験文集がまとめられた。子供の作文は読むものの心を打つ。ただ、読む側には行間を読み取る感性と想像力も必要である。「語り継ぐ」はこの行間を埋め、大人たちに震災時の子供達の体験を生々しく伝えてくれる。防災を考えると、子供の命を守ろうとすると、子供の視点で見た震災体験はきっと役立つだろう。

(2) 災害を体験した舞子高校を中心とした地域、コミュニティ、都市が災害に強くなる。

阪神・淡路地域では新たな防災体制づくりがスタートしている。そこでは、ハード面だけではなく、コミュニティづくり、まちづくりといったソフト面を前面に打ち出し、市民を中心とした防災が始まっている。環境防災科の生徒が、学校周辺地域での防災訓練に参加したり、自分の住んでいる地域で防災訓練に参加したりする。学校での震災メモリアル行事で防災にとりくんでいる姿を発信する。このような活動が地域へのインパクトとなる。地域内の小学校で防災授業を行えば、その授業を受けた小学生は必ず家庭でそのことを語り、防災が子供から家庭へ、家庭から地域へと広がっていく。若者が防災に積極的、主体的にかかわる効果は計り知れない。

泥をかき出すボランティア



新潟中越地震支援の街頭募金



(3) 阪神・淡路大震災の教訓を継承・発信することで他の地域が新たな災害に備え、災害による被害が世界中で減少していく。

ある地域で災害が発生し、多大な犠牲が払われて貴重な教訓が生み出される。しかしその教訓は他の地域、他の国に転移されることなく、同規模の新たな災害でまたしても同じような被害が発生してしまう。20世紀はこんな悲劇の繰り返しであった。21世紀になっても世界ではいまだに多くの地域で災害が発生しているが、被害のほとんどは発展途上国に集中している。新たな被害を抑止するためには、防災にとりくんでいる若者が阪神・淡路大震災の教訓を世界に伝えることが重要である。

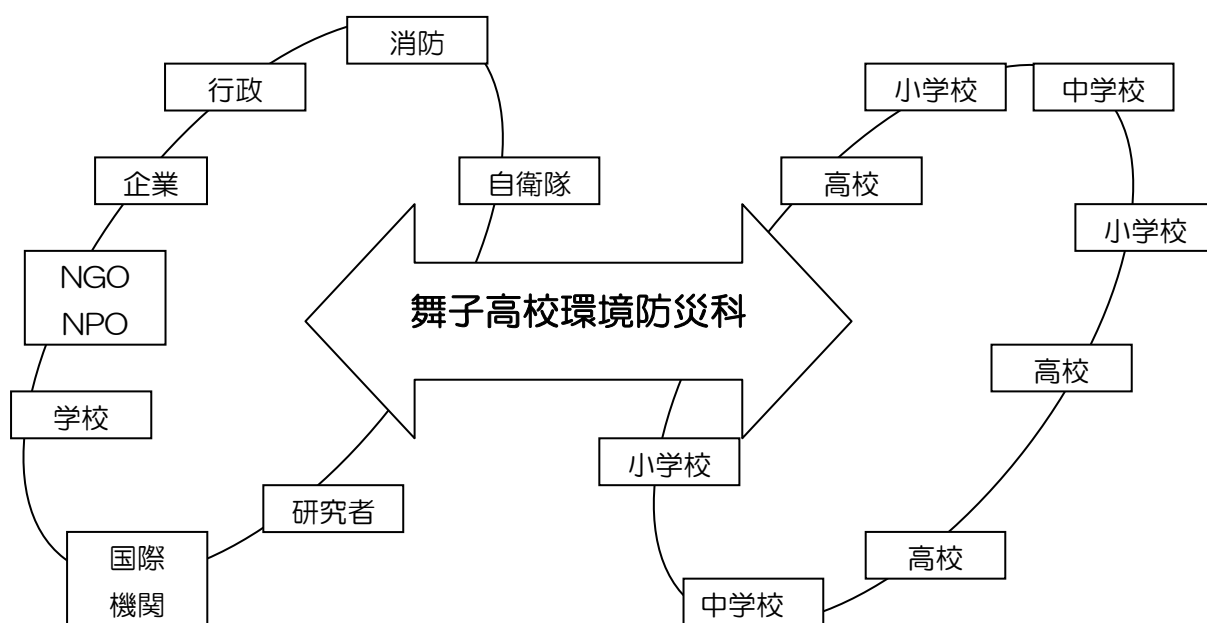
環境防災科の生徒は、世界と接する機会をたくさん与えられてきた。アジア防災センターや国連地域開発センター、JICA といった組織が主催する研修で舞子高校を訪れた途上国の人々と、あるときは英語を使って、あるときは通訳の助けを借りて、震災体験を話したり、防災の大切さを説いたりしている。ネパールのNGOの援助で過去3年間、希望者がネパールを訪れ、交流を深める機会を得た。生徒の与えるインパクトは計り知れない。ぜひ続けたい交流である。神戸で行われる国連などの会議に出席し、途上国の大臣と意見交流したり、途上国の代表の発表を聞いたりして、途上国と先進国の関係、災害と途上国の関係、途上国への支援のあり方を学ぶ機会を得た。平成17年(2005年)1月の国連防災世界会議では、生徒が発表者となって震災体験と環境防災科の学習から考えた自分の意見を各国の専門家に発表した。これらの場で堂々と自己主張する生徒に対して、世界から期待が寄せられ、あわせて、阪神・淡路大震災の教訓への理解も深まっている。震災体験を繰り返さないためにどう備えればよいかを、途上国は環境防災科の生徒の発表からも学ぼうとしている。

8. 防災教育ネットワーク

防災教育にとりくんできてネットワークの大切さに気づいた。ひとつは、先進的に「新たな防災教育」にとりくんでいた小学校や中学校の実践とつながることである。阪神・淡路大震災から10年間、新たな防災教育としてさまざまな実践が行われてきた。これらの実践に学ぶこと、そこから高校での防災教育の可能性を探ることは意義深い。一方、震災から5年経って研究をはじめ、7年目にスタートした環境防災科は、先例に学びながらも、学科としての独自性を生かさなければならない。環境防災科は防災教育に3年間で最低25単位を使うことができる。大雑把に言えば3年間で750時間程度を防災教育にあてることができるのである。その恵まれた環境を生かして防災教育のパイロット的存在となり、新たな防災教育を広める使命がある。避難訓練や防災訓練だけで終わらない防災教育、市民教育としての防災教育を広めるために、HPの充実や冊子の編集にもとりくんでいる。それをもとにして防災教育ネットワークを構築したい。

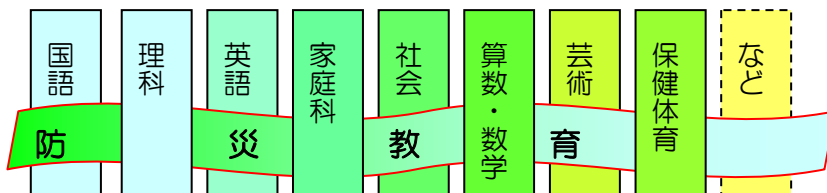
環境防災科の設置が決まった平成12年（2000年）4月から、防災とは何かを考えて大学の先生方を尋ねたり、消防などの行政に話を聞きに行ったりした。防災のワークショップに出席してたくさんの市民と知り合いになり、それがネットワークとして広がっていった。また、舞子高校では1月17日前後に「震災メモリアル行事」を行っている。記念講演があって、パネルディスカッションがあって、中学生や高校生の発表があって、NPOや消防、自衛隊、大学の先生など、防災の最前線で活躍している人の分科会があって、1000人規模の大きな行事である。この行事につながってくれる人々も大切なネットワークである。

防災教育ネットワークと防災ネットワークをうまくつなぎ二重のネットワークをつくって、学校に外部の専門家、体験者、市民を招き授業をしてもらう。学校を飛び出して地域で学習する。こんな関係が防災を広げていくことにつながるのではないだろうか。



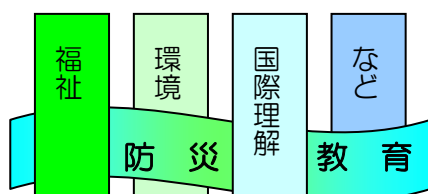
9. 終わりに

防災教育はさまざまな教科・科目にかかわっていて、どの教科・科目にも防災教育の素材を見つけることができる。国語では災害の文学を読むことが可能である。古典では噴火や飢饉、火災への人々の恐れや無常観を読み取ることができる。理科には自然災害の単元があるし、環境問題を



学ぶときも地球環境の悪化が自然災害を増加させていることに着目すれば、地球的規模の環境保全と防災の学習につながっていく。災害に関する記事を英語で読んだり、海外の被災地に英語で励ましの手紙を送ったりもできる。家庭科で調理実習をするときは炊き出しにとりくんでもおもしろい。避難所での配給食の栄養調査をしたり、家の見取り図を描いて耐震性について考えたりすることも可能だ。地理で地形を学ぶときも防災の意識を忘れずにしたい。小学生では、地域の地図を描いて危険箇所を書き込んだりもできる。歴史で遷都を学ぶとき、年号や都の名前を記憶するだけでなく、都を建設し人々の生活を維持するためにどれだけの森林が破壊されたかを考えてみればいい。森林荒廃が洪水につながり遷都の一因となったことを学べる。数学や物理といった科目でも、地滑りや土石流の発生する関数を計算してみたりと、工夫次第では防災の授業が可能だ。保健体育では心肺蘇生法を学び、安全学習を深めることができる。心のケアなどの課題も保健体育で学ぶ。これらはあくまでも一例である。教科を担当する教員の工夫次第でさまざまな単元を作ることが可能であり、多様な防災教育が実施可能である。

総合的な学習の時間が導入され、教科・科目を離れて、「環境」や「福祉」、「国際理解」といった



課題に取り組むことが可能になった。これらの課題そのものが学際的なものだが、ここでも先に述べた教科・科目と同様の工夫で防災教育にとりくめる。局地的な大雨（つまり洪水）や旱魃は地球温暖化と関係があるといわれている。環境の保全が防災に直結していることを学ぶことができる。開発途上国の防災の現状を学ぶことは国際理解であり、防災教育でもある。日常的な事故の被害者の多くは

老人と子供といわれている。非日常的な災害（自然災害）の被害も同様に老人と子供に厳しい傾向がある。日ごろから老人や子供、障害者が安全・安心に暮らしていけるまちづくりをすすめること、つまり福祉の課題は、防災の課題でもある。このように、工夫次第では、防災は「特別なこと」ではなくなり、日常の授業でとりくむことが可能になってくる。必要なことは、まずはじめてみることである。

はじめて防災教育にとりくもうとすると、その全体像がつかめず、したがって何から手をつけたらよいかわからず、途方にくれている教師は多いと思う。そして、とりあえず、避難訓練を実施して、もう少しがんばって防災訓練で終わったことにしようとしているのではないだろうか。この二つの訓練の重要性は計り知れない。ただ、それをやっかいな行事としてただ消化していつているだけというのが、多くの学校の現状ではないだろうか。そんな学校関係者がこの小冊子を読んでもらうと、それがヒントとなって独自の防災教育を構築し、それを、全国、全世界で防災教育にとりくむ関係者に発信してくれたら幸いである。できあがった「防災教育ネットワーク」が、より広く、さらに深い防災教育をつくり上げていこう。

兵庫県立舞子高等学校

〒655-0004

神戸市垂水区学が丘3-2

TEL 078-783-5151

FAX 078-783-5152

E-mail: maiko-hs@hyogo-c.ed.jp

担当者：諏訪清二